九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

〈キャラ〉行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

大野, 遥香
九州大学大学院人間環境学府

佐々木, 玲仁
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/7169355

出版情報：九州大学心理学研究. 25, pp.21-29, 2024-02-26. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Kyushu University Psychological Research
2024, Vol.25, 21-29

〈キャラ〉行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

大野　遥香　九州大学大学院人間環境学府
佐々木玲仁　九州大学大学院人間環境学研究院

Construction of a “chara” behavioral scale and examination of its reliability and validity

Haruka Ono（*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*）
Reiji Sasaki（*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*）

In this study, we redefined the concept of “chara,” commonly understood as denoting a role or position within a group, as a transient self that emerges within relationships. We then devised a scale to measure the tendency to embody a “chara” in daily life. Based on earlier research, we developed a questionnaire based on the concepts of enacted roles, self-pluralism, fragmented self-expression, fixation, and use of different “chara.” The questionnaire was administered to undergraduate and graduate students. The results were used to develop a “chara” behavioral scale consisting of two subscales: relational-dependency enactment and fixed-role enactment. The reliability of this scale was corroborated by the fact that each subscale showed sufficient internal consistency, and its validity was substantiated through a positive correlation with the self-monitoring scale. In addition, a ceiling effect was observed for several questionnaire items, particularly those measuring self-pluralism and use of multiple identities, indicating that many people today harbor multiple selves and identities.

Key Words: “chara”, enactment, multiple identities

Ⅰ　問題・目的

1. 現代の対人関係と自己像

我々は，日常的に様々な顔を使い分けながら他者とコミュニケーションを取っている。例えば，全くの初対面の相手と話すときと気心の知れた友人と話すときとで，振る舞い方が一切変わらないという人はそういないだろう。このように相手との親密さや関係性，相手の年齢や立場，会話をする場面などによって，我々の振る舞い方や相手への接し方は変化し，同じ人物であっても場面が変わると別人のように見えるということもある。以上のように，状況に応じて異なる人物のように振る舞いながら，複数の自分を使い分けるという自己のあり方は多元的自己と言われており，思春期・青年期の若者を中心とした現代社会に生きる人々は，多元的な自己を持つ傾向があるとされる。これについて浅野（2015）は，1980年代後半以降の若者の友人関係は状況に応じて切り替わっていく状況志向的なものとなり，彼らの自己は関係や状況の多元性に応じて多元的なものになっていったと述べている。また渋川・松下（2010）は，現代大学生の自己は相手に合わせて意識的・無意識的に変化する傾向があり，それぞれの自己側面のつながりが失われて解離・断片化する新たな自己のあり方が一般化していると指摘している。つまり，現代青年は状況に応じて自己を多様に変化させており，一貫した自己イメージを持たないのではないかとさえ言われているのである。

2. 〈キャラ〉を介した対人関係

多元的な自己に関連して，現代青年の対人関係と自己のあり方として特徴的とされるのが，コミュニケーションにおける「キャラクター」という概念である。元々，日本語のカタカナ表記でいう「キャラクター」とはマンガ・アニメ・ドラマの登場人物を指す言葉である。それが転じて芸風やイメージという意味の業界用語としても用いられていたが，1990年代末ごろには人間関係に関する言葉として定着した（後藤，2010）。特に「キャラクター」を省略した「キャラ」という語は若者言葉として浸透しており，「いじられキャラ」や「ツッコミキャラ」のように友人グループの中で何らかの役割演技を行うことや，場の空気に合わせて素の自分とは異なる振る舞いをすることは「キャラを演じる」と表現され，現代青年はこのような「キャラ」を介したコミュニケーションを日常的に行っているとされる。これ以降，本研究においては「集団の中での役割や立ち位置，または個性などを意味する若者言葉」を〈キャラ〉と表記し，そのほかの意味とは区別して扱う。また「キャラクター」という言葉も同様の意味で使用されることがあるが，略称の〈キャラ〉に統一する。

3.〈キャラ〉に関する先行研究

2000年代以降，近年の若者に特徴的なコミュニケーションの様式として，複数の研究者が〈キャラ〉に言及するようになった。後藤（2010）によると，多くの文献では若者の友人関係を表層的でうわべだけの人間関係と評価し，〈キャラ〉を従来の性格や人格とは異なった拙い自己像と見なすなど，ネガティブなものとして語られていた。また，〈キャラ〉を介したコミュニケーションによって生じうる問題についても指摘されている。本間（2009）は，〈いじられキャラ〉となっている子への支援に関する論考において，〈いじられキャラ〉という役割を演じる子どもの多くは自分の意思でその〈キャラ〉を選択したというより，様々な圧力によってその位置に立たされており，一見楽しそうに振舞っていても心底そうであるとは限らないと述べている。今（2011）は，多くの若者が自分の周囲の人間との関係を心地よいものとするための作法として〈キャラ〉作りを行っているとしたうえで，自分の所属するコミュニティに受け入れられるために，自己演出した人格を演じ続けることに疲れ果て，アイデンティティを見失うという「〈キャラ〉疲れ（今，2011）」を引き起こす者も多いとする。以上のように〈キャラ〉についての論考では，〈キャラ〉は演じる者をその役割に縛り付け不自由にするとされ，その否定的な側面を強調されることが多かった。

2015年頃から〈キャラ〉は心理学の領域でも注目されるようになり，様々な観点から質問紙調査やインタビュー調査などの実証的な研究が行われている。千島・村上（2015）は〈キャラ〉を介した関係に関する先行研究を整理したうえで，大学生の〈キャラ〉についての考えを調査し，〈キャラ〉を持つことのメリットとして「人間関係の単純化や相手の理解のしやすさ」，「コミュニケーションの円滑化」，「居場所の獲得」の3点があると述べている。第1のメリットである「人間関係の単純化や相手の理解のしやすさ」は，コミュニケーションをする相手を〈キャラ〉という一面的な人物像として認識することで，相手を理解しやすくなることを意味している。土井（2009）は人格の多面性をそぎ落とし，限定的な最小限の要素で描き出された〈キャラ〉という人物像は，錯綜した不透明な人間関係を単純化し透明化すると述べている。つまり，〈キャラ〉を介した対人関係は，多面性を持つ人間同士の複雑な関係を一面的な〈キャラ〉同士の単純な関係に置き換えることができるのである。第2のメリットである「コミュニケーションの円滑化」は，〈キャラ〉を用いることによって友人関係が分かりやすいものとなるということである。斎藤（2011）は，相手がどのような〈キャラ〉であるかが分かれば，自動的に自身のふるまい方が決まるという点において，〈キャラ〉の最大のメリットはコミュニケーションの円滑化であるとする。第3のメリットである「居場所の獲得」は，自分の〈キャラ〉を友人に理解してもらうことで，集団内に自分の役割や立ち位置を確立することが出来るということである。他の人とは被らない〈キャラ〉によって，自分の存在を唯一固有のものとして位置づけることで，集団を自分にとって心地よい居場所として認知することが出来るとされる（今，2011）。

また千島・村上（2016）は，自分の〈キャラ〉があると感じている者はそうでない者と比べて自己有用感が高いこと，〈キャラ〉を積極的に受容している者は，自尊感情と居場所感が高いことを明らかにした。さらに村井・岡本（2021）は，〈キャラ〉が形成・維持されるプロセスについて大学生を対象としたインタビュー調査を行い，〈キャラ〉には周囲から付与された〈キャラ〉への適応を強いられるという受動的な側面だけでなく，青年自身が集団への適応および理想の自己像を模索するなかで生じるという能動的な側面もあると考察している。

このように〈キャラ〉を用いている青年自身の感じ方や考え方に焦点を当てた実証的な研究によって，〈キャラ〉には肯定的で合理的な面もあることが示されると同時に，現代青年の友人間のコミュニケーションのあり方や自己の捉え方の特徴が示唆された。したがって，現代青年の〈キャラ〉について検討することで，近年大きく変化しているとも言われる彼らの友人関係の実態や，ひいては自己意識について明らかにすることが出来ると思われる。

4. 先行研究における課題

以上に述べたような先行研究を検討したうえで，本研究では〈キャラ〉研究における以下の3つの課題に着目する。

第1の課題は，〈キャラ〉としてふるまう傾向を測定する方法が確立されていないという点である。〈キャラ〉に関する研究での質問紙調査において用いられることが多いのは，普段から友人に言われる，または自分で意識している〈キャラ〉はあるかを尋ね，あるという場合にはその〈キャラ〉の名前と特徴などを答えることを求めるという手法である（千島・村上，2015；千島・村上，2016；村井・岡本・太田・加藤，2019；島，2019）。キャラ名を記入した者を〈キャラ〉あり群とし，〈キャラ〉がないあるいは分からないと回答した者を〈キャラ〉なし群とするこの方法では，〈キャラ〉という曖昧な概念の解釈を回答者に委ねており，妥当性の高い測定方法とは言えない。また，〈キャラ〉の有無のみを測定しているため，どのくらいの頻度で〈キャラ〉を意識した行動をしているのかなど，〈キャラ〉があると感じている者の間の差異を捉えることが出来ないという問題もある。

第2の課題は，先行研究においては〈キャラ〉概念と

して十分に検討されていない観点があるという点である。〈キャラ〉に関する研究は，もともと若者の間で使われていた言葉を研究者が議論の俎上に載せたことから始まっているため，その定義は各研究者によって異なる。千島・村上（2015）は先行研究を整理して，〈キャラ〉を「小集団内での個人に割り振られた役割や関係依存的な仮の自分らしさ」と定義した。多くの心理学的な研究はこの定義に依拠しているが，「小集団内での個人に割り振られた役割」としての〈キャラ〉に焦点を当てていることがほとんどであり，〈キャラ〉の「関係依存的な仮の自分らしさ」という側面について言及することは少ない。では，この「関係依存的」や「仮の自分らしさ」とは何を意味しているのだろうか。千島・村上（2015）においては明確に説明されていないため，複数の〈キャラ〉に関する先行研究を用いて検討する。〈キャラ〉は「関係依存的・文脈依存的・状況依存的に成り立つ自分らしさ（浅野，2006）」「ある関係におけるそれなりに正直な自己を分かりやすく表現したもの（浅野，2015）」，「関係性を前提として生成する対人関係のためのインターフェイス（斎藤，2011）」とも定義されている。先行研究におけるこれらの定義から，「仮の自分らしさ」とは，コミュニケーションをする相手との関係性，文脈や状況などに応じて立ち現れてくる自己を意味していると考えられる。言い換えると，〈キャラ〉とは相手やその場と主体との関係によって作り出される仮の自己像と考えられるのである。以上の議論を踏まえ，本研究では〈キャラ〉を「関係の中で成立する仮の自己」と定義する。本研究においては，〈キャラ〉を単なる固定化された役割やイメージとするのではなく，対人場面に応じて変化する仮の自己として捉えなおす。またここでいう関係は人と人との関係に限定せず，状況やコミュニケーションの場と人との関係も含める。さらに，コミュニケーションにおいて〈キャラ〉として振舞うことを「〈キャラ〉行動」と表記する。

第３の課題は，〈キャラ〉の使い分けについてはほとんど検討されていないという点である。先行研究において〈キャラ〉は，他律的に決定されコントロールが効きにくい（斎藤，2011）ものとされ，友人グループなどの集団における決まった役割や立ち位置と捉えられている。また，質問紙やインタビューにおいて協力者の〈キャラ〉を尋ねる際に，周囲から言われるあるいは自認している〈キャラ〉の名前を１つだけ回答するように求めていることからも，１人が持つ〈キャラ〉は１つであることを前提としていることが分かる。このように，これまでに行われてきた〈キャラ〉の先行研究では，青年が自認している〈キャラ〉は１つだけで，彼らはそれに縛られているとされていた。しかしながら荻上（2008）は，集団や場所などコミュニケーションを行う場所自体が，そこで行われるコミュニケーションや〈キャラ〉の性質にある種の序列付けや方向付けを行っているとしたうえで，若者はその状況に適した〈キャラ〉を使い分けることを求められると述べている。つまり，関わる相手やその場と主体との関係性に応じて複数の〈キャラ〉を柔軟に使い分けていると考えられるのである。よって，コミュニケーションの場によって〈キャラ〉の使い分けがなされているという点についても検討する必要があると考える。

以上のことを踏まえ，本研究では〈キャラ〉行動傾向を測定することが出来る心理尺度を作成し，第１の課題を解決することを目指す。また，〈キャラ〉概念のこれまで考慮されていなかった側面に着目して尺度作成を行うことで，第２・第３の課題にも対応することが出来ると思われる。

5. 信頼性と妥当性の検討

本研究においては作成した尺度の信頼性と妥当性を検討することを第二の目的とする。信頼性を検討するため，各下位尺度の α 係数を算出する。また妥当性を検討するために，改訂セルフ・モニタリング尺度（Lennox & Wolfe, 1984 石原・水野訳，1992）との相関を分析する。セルフ・モニタリングとは，Snyder（1974）によって提唱された概念であり，「状況や他者の行動に基づいて，自己の表出行動や自己呈示が，社会的に適切なのかを観察し，自己の行動を統制することである（岩淵・田中・中里，1982）」と定義される。石原・水野（1992）によると，周囲の状況や他者の行動などの状況要因に影響されやすい人はセルフ・モニタリング傾向が高く，反対に自己の内的状態や気質などの個体要因に影響されやすい人はセルフ・モニタリング傾向が低いとされる。前述した通り〈キャラ〉はコミュニケーションをする相手やその状況に応じて形成されることから，〈キャラ〉行動をする者は周囲の外的要因によって振る舞いを変えていると考えられる。したがって，〈キャラ〉行動の傾向が高い人は，セルフ・モニタリング傾向も高いと思われる。本研究では，石原・水野（1992）が作成した改訂セルフ・モニタリング尺度の日本語版を用いて，〈キャラ〉行動尺度の妥当性を検討する。

以上のことから本研究では，〈キャラ〉行動傾向について測定する心理尺度を作成することを第一の目的とする。また，作成した尺度の信頼性と妥当性を検討することを第二の目的とする。

Ⅱ．方法

1. 項目作成

先行研究から〈キャラ〉行動の構成概念を「演技性・

自己の多元性・断片的な自己表現・固定性・使い分け」と仮定し，独自に項目を作成した（Table 1）。以下，詳述する。

1）演技性

大山（2021）は，〈キャラ〉という概念は環境との駆け引きから生じる演技という要素を含んでいるとしたうえで，〈キャラ〉を「演じる自分」と呼んだ。また「〈キャラ〉を演じる」という言葉が日常的に用いられていることからも，〈キャラ〉行動には，何らかの仮の自分を演じているという感覚が伴うと考えられる。よって，「演技性」を構成概念とした。

2）自己の多元性

浅野（2015）は，〈キャラ〉を「多元的自己の個々の部分的な人格を指し示すもの」として論じている。このように，〈キャラ〉は社会学領域において多元的自己との関連が論考されてきた（村井・岡本，2021）。このことから，〈キャラ〉行動を行う傾向がある人は，自分自身を多元的なものと捉えている可能性があると考えられる。よって「自己の多元性」を構成概念とした。また，自己多元性測定尺度（藤田，2022）から自己の一貫性を意味する項目を逆転項目として採用した。

3）断片的な自己表現

前述の通り〈キャラ〉は限定的な最小限の要素で描き出された人物像（土井，2009）であるとされる。加えて，青年は自己像と類似した〈キャラ〉を自認していることも明らかにされている（大山，2021）。これらのことから，〈キャラ〉は単なる役割や仮面ではなく自己をより単純に描いたイメージであると考えた。よって〈キャラ〉行動には，自己のある一面を強調して分かりやすく表現するという側面があると考え，「断片的な自己表現」を

Table 1
質問項目一覧

演技性
1.（2） 人と話すときに，何らかの人柄を演じていると感じることがある
2.（4） 人と話すときは，いつも何らかの人柄を演じている
3.（12） 人と話すときに，本当の自分とは別の人柄を演じていると思うことがある
4.（19） 人と話すときは，常に本当の自分とは全く別の人柄を演じている
5.（24） 場の空気に流され自分らしくない役割を演じることがある
自己の多元性
6.（1） 場面によって表に出てくる自分は違うと思う
7.（11） 付き合う相手によって，表に出てくる自分は全く違うと思う
8.（15） 本当の自分らしくふるまうときと，そうでないときとがある
9.（8） 本当の自分は，一つだけではないと思う
10.（22）本当の自分なんてないと思う
11.（26）どんな場面でも自分が変わることはない＊
12.（18）状況が変わっても一貫した自分がある＊
断片的な自己表現
13.（17）人と話すときに，自分の個性のある部分を押し出してふるまうことがある
14.（27）友人などの前で，自分の個性を分かりやすく表現しようとすることがある
15.（6） あまり親しくない相手の前では，自分の人柄のごく一部しか見せていない
16.（9） 自分の個性や特徴について，他の人から「○○キャラだね」と言われることがある
固定性
17.（7） 日頃最もよく関わっている集団の中で，自分は決まった役割を担うことがある
18.（10）日頃最もよく関わっている集団の中で，自分には固定された役割やイメージがあると思う
19.（13）日頃最もよく関わっている集団の中での固定された役割やイメージからは，逃れられないと思う
20.（16）日頃最もよく関わっている集団の中で，自分の立ち位置を確立するために何らかの役割をいつも担っている
21.（20）日頃最もよく関わっている集団の中で，それぞれのメンバーには役割がある
22.（23）日頃最もよく関わっている集団の各メンバーは，それぞれの役割にそったふるまいをしている
23.（28）日頃最もよく関わっている集団の中では，それぞれのメンバーの役割やイメージにそったやり取りしかしない
使い分け
24.（14）話す相手によってふるまい方を使い分けている
25.（3） 付き合う相手によって，話し方やふるまい方が変わらないということはない
26.（21）初対面の相手と話すときに，普段の自分とは違うふるまいをすることがある
27.（25）親しい相手とそうでない相手とでは，話し方やふるまい方が違う
28.（5） 集団の雰囲気によって，話し方やふるまい方を使い分けている
29.（29）集団によって，自分の人柄は違っているように見えると思う
＊逆転項目である
括弧内の数字は質問紙で提示された順番を示す

構成概念に含めた。

4）固定性

〈キャラ〉は所属する集団における固定的な役割や立ち位置であるとされ，少人数の友人グループやクラスというメンバーが固定化された集団の存在が前提とされている（土井，2009；斎藤，2011）。また，前述した通り〈キャラ〉は集団の中で他律的に決定され，コントロールが効きにくい（斎藤，2011）。つまり，〈キャラ〉は集団の雰囲気やそのメンバーとの関係性などから決定され，個人によって変更を加えることは難しいと考えられる。よって，〈キャラ〉行動には特定の小集団内で決められた役割を持つ自己を演じるという側面があると考えられるため，「固定性」を構成概念とした。

5）使い分け

上述の通り〈キャラ〉は状況に応じて切り替わっていると考えられる（荻上，2008）ことから「使い分け」を構成概念とした。

2. 調査対象者

日本国内の10代・20代104名（男性22名，女性82名，平均年齢20.8歳（SD = 1.98））

3. 調査時期

2022年11月

4. 調査手続き

調査はGoogle Formを用いたwebアンケートの形式で実施した。アンケートのURLを添付したメッセージを著者および著者の知人が所属するLINEグループに送信し，無記名で回答を求めた。

5. 質問紙の構成

1）本調査協力依頼の別紙　調査の目的や注意事項を記載し，倫理的配慮として質問紙への回答は自由であり不参加によって不利益が生じることはないことや，心理的な負担を感じた場合は回答を中止してかまわないことなどを明記した。

2）フェイスシート　性別と年齢の回答を求めた。

3）〈キャラ〉行動尺度

「演技性」を測定する5項目，「自己の多元性」を測定する7項目，「断片的な自己表現」を測定する4項目，「固定性」を測定する7項目，「使い分け」を測定する6項目の全29項目からなる。

『日常的なコミュニケーションをするときのあなたについて，以下の質問はどのくらいあてはまりますか。最もあてはまる数字を一つ選んでください。』と教示し，「あてはまらない」から「あてはまる」の5件法で回答を求めた。また，質問項目における「集団」については，『質問の中での「集団」とは，「あなたが日常的に関わりを持っている3人以上のグループ」のことを指します。例えば，友人グループやサークル，部活，職場集団などのことです。現在，日常的に関わっている集団がないという場合には，過去にあなたが関わっていた集団について答えてください。』と教示した。

4）改訂セルフ・モニタリング尺度（Lennox & Wolfe, 1984 石原・水野訳，1992）

「他者の表出行動への感受性」を測定する6項目と「自己呈示の修正能力」を測定する7項目の全13項目からなる。

『あなた自身について，以下の質問はどのくらいあてはまりますか。最もあてはまる数字を一つ選んでください。』と教示し，「あてはまらない」から「あてはまる」の5件法で回答を求めた。

6. 倫理的配慮

本調査は筆者の所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。調査協力者には，データはすべて統計的に処理され，個人が特定されることはないこと，調査目的以外でデータを使用することはないこと，データは厳重に管理し研究終了後に適切に処分すること，調査への参加は自由意思に基づくものであり参加しないことで不利益が生じることはないこと，回答の途中で心理的な負担を感じた場合は直ちに回答を中止しても構わないことを教示し，同意を得たうえで回答を求めた。

Ⅲ．結果

1. 天井効果・床効果の検討

質問項目ごとに平均と標準偏差を求め，項目の分布の検討を行ったところ，項目6，8，9，15，24，26，27，28において天井効果が見られたため，削除した。また，項目11において床効果が見られた。

2. 因子分析

残った20項目について，最尤法，Promax回転による因子分析を行った。いずれの因子においても.40以下の負荷量を示した項目5，7，10，12，13，14，16，19，23を削除しながら，因子分析を繰り返し行った。固有値の変化と解釈可能性から，最終的に2因子構造を採用した（Table 2）。なお，累積寄与率は54.0％であった。第1因子は「人と話すときに，何らかの人柄を演じていると感じることがある」「付き合う相手によって，表に出てくる自分は全く違うと思う」のような，関わる相手や集団に応じて異なる人柄を演じていることを意味する項目の負荷量が高かった。そこで，「関係依存演技」（α = .85）と命名した。第2因子は「日頃最もよく関わっ

Table 2
〈キャラ〉行動尺度についての因子分析結果（n = 104, R = .54）

第1因子：関係依存演技（α = .85）		F1	F2
1.（4）	人と話すときは，いつも何らかの人柄を演じている	.96	-.15
2.（12）	人と話すときに，本当の自分とは別の人柄を演じていると思うことがある	.85	-.11
3.（2）	人と話すときに，何らかの人柄を演じていると感じることがある	.80	-.12
4.（11）	付き合う相手によって，表に出てくる自分は全く違うと思う	.60	.11
5.（19）	人と話すときは，常に本当の自分とは全く別の人柄を演じている	.58	.06
6.（29）	集団によって，自分の人柄は違っているように見えると思う	.44	.06
第2因子：固定的役割演技（α = .85）		F1	F2
7.（20）	日頃最もよく関わっている集団の中で，それぞれのメンバーには役割がある	-.11	.92
8.（23）	日頃最もよく関わっている集団の各メンバーは，それぞれの役割にそったふるまいをしている	-.03	.87
9.（7）	日頃最もよく関わっている集団の中で，自分は決まった役割を担うことがある	-.13	.73
10.（10）	日頃最もよく関わっている集団の中で，自分には固定された役割やイメージがあると思う	.07	.54
11.（16）	日頃最もよく関わっている集団の中で，自分の立ち位置を確立するために何らかの役割をいつも担っている	.33	.52
括弧内の数字は質問紙で提示された順番を示す		因子間相関	.42

ている集団の中で，それぞれのメンバーには役割がある」「日頃最もよく関わっている集団の中で，自分は決まった役割を担うことがある」のような，特定の集団において自他が決まった役割を担っていることを意味する項目の負荷量が高かった。そこで，「固定的役割演技」（α = .85）と命名した。

3. 妥当性の検討

次に尺度の基準関連妥当性を確認するために，〈キャラ〉行動尺度の総得点及び各因子の得点と改訂セルフ・モニタリング尺度の得点間の相関係数を算出した。その結果，〈キャラ〉行動尺度と改訂セルフ・モニタリング尺度との間に有意な正の相関が見られた（r = .27, p < .01）。また，固定的役割演技因子にも有意な正の相関が見られた（r = .28, p < .01）。一方で，関係依存演技因子には有意な相関が見られなかった（r = .18, *n.s.*）。

Ⅳ．考察

1. 〈キャラ〉行動尺度の作成

本研究では，〈キャラ〉行動の傾向を測定する〈キャラ〉行動尺度を作成し，作成した尺度の信頼性と妥当性について検討した。以下では，本研究の目的であった〈キャラ〉行動尺度の作成について述べ，〈キャラ〉行動尺度と改訂セルフ・モニタリング尺度の関連，現代青年のアイデンティティ及び〈キャラ〉と多元的自己の関係について考察する。

まず，〈キャラ〉行動尺度の作成に関して質問紙を施行した結果，関係依存演技と固定的役割演技の2因子が抽出された。また，2つの因子それぞれについて十分な内的整合性が示された。加えて改訂セルフ・モニタリング尺度との有意な相関が示されたことから，基準関連妥当性が確認された。そのため，本研究においては信頼性と妥当性に基づいた尺度によって〈キャラ〉行動傾向を測定することができたと思われる。

項目作成において，〈キャラ〉行動には「演技性」，「自己の多元性」，「断片的な自己表現」，「固定性」，「使い分け」という5つの構成概念があることを想定していたが，因子分析の結果から2因子構造が最もデータの構造を説明できると思われた。また，「自己の多元性」に関する項目は「場面によって表に出てくる自分は違うと思う」などの4項目が，「使い分け」に関する項目は「話す相手によってふるまい方を使い分けている」などの4項目が天井効果を示したため削除された。このように，「自己の多元性」と「使い分け」はどちらも6項目中4項目について，多くの調査協力者が「あてはまる」または「ややあてはまる」と回答していた。したがって，現代の青年にとって場面に応じて話し方やふるまい方を使い分けることは当然であり，また単にふるまいを変えるだけでなく，場面ごとに現れる自分は別人のようであるとさえ認識していると考えられる。さらに「断片的な自己表現」に関する「人と話すときに，自分の個性のある部分を押し出してふるまうことがある」などの項目は，どちらの因子にも十分な因子負荷量を示さなかったため削除された。〈キャラ〉は自分の個性の一部を切り取って強調したものである（土井，2009）とされていたが，本研究において自分らしさの一側面を強調してふるまうことは〈キャラ〉行動傾向との関連が低いと示された。最終的には，「演技性」に関する4項目と「自己の多元性」の1項目，「使い分け」の1項目が第1因子を構成し，「固定性」に関する5項目が第2因子を構成するという結果となった。

次に，各因子の内容について述べる。第１因子である関係依存演技は，関わる相手や集団，状況によって異なる人柄を演じるという傾向を示す因子である。また，本当の自分とは異なる人柄を演じているという内容の項目が含まれることから，演じている人柄は自認する自分らしさとは異なる性質を持ったものであると考えられる。第２因子である固定的役割演技は，日常的に関わりを持っている集団において各メンバーには決められた役割やイメージがあり，集団内ではそれらに合わせた振る舞いをするという傾向を示す因子である。関係依存演技因子が対人場面によって〈キャラ〉を演じ分ける，あるいは演じる〈キャラ〉が変化するという傾向を意味しているのに対し，固定的役割演技因子は特定の集団において固定化された〈キャラ〉を付与され，その〈キャラ〉に合わせた振る舞いをするという傾向を表している。

〈キャラ〉に関する先行研究には３つの課題があったが，本研究において作成した尺度では，その全てに対応することが出来たと思われる。第一の課題は，〈キャラ〉を介したコミュニケーションを測定する方法が確立されていないという点であったが，本研究においては信頼性と妥当性のある〈キャラ〉行動尺度を作成することができた。この尺度により，〈キャラ〉行動自体の傾向の高低を評価することできることに加え，関係依存演技と固定的役割演技という性質が異なる〈キャラ〉行動の傾向についても比較することが可能になると思われる。

第二の課題は，〈キャラ〉には「役割」と「仮の自分らしさ」の２つの観点があるとされていた（千島・村上，2015）ものの，後者についてはこれまで注目されていなかったことであった。ここでいう役割とは，集団における役割や立ち位置のことであり，それらを持つ自己を演じることが本研究における固定的役割演技と一致する。また，仮の自分らしさとは，相手との関係や状況に応じて成り立つ自分らしさのことを意味しており，それを演じるということが本研究における関係依存演技の内容と一致する。したがって，今回作成した尺度は，これまでの研究で指摘されることが少なかった側面も含めた広い範囲の〈キャラ〉行動を測定することが可能であり，また日常的な〈キャラ〉行動の実態に即したものであると言える。

第三の課題は，状況に応じた〈キャラ〉の使い分けがなされているという点がほとんど考慮されていなかったことであった。先行研究においては一人につき一つの〈キャラ〉に絞って調査されていたが，実際には状況に応じて〈キャラ〉が変化することもあると考えられたため，本研究では〈キャラ〉行動の構成概念として「使い分け」を採用して項目を作成した。結果として６項目中４項目が天井効果を示し，多くの青年が日常的に〈キャラ〉の使い分けを行っていることが示唆された。加えて「使い分け」に関する「集団によって，自分の人柄は違っているように見えると思う」という項目が第一因子に含まれていることから，本研究において作成した尺度は〈キャラ〉を使い分ける傾向についても検討することが出来ると思われる。

2. 改訂セルフ・モニタリング尺度との関連

次に，〈キャラ〉行動尺度の総得点と改訂セルフ・モニタリング尺度との相関について検討したところ，有意な正の相関が見られたことから，〈キャラ〉行動傾向が高い者はセルフ・モニタリング傾向も高いという仮説を支持する結果となった。また，〈キャラ〉行動尺度の各因子と改訂セルフ・モニタリング尺度との関連を検討したところ，固定的役割演技因子との間に有意な正の相関が見られた。このことから，集団内で決まった役割を担うという〈キャラ〉行動をする人は，対人場面において周囲の状況や他者の行動を観察した上で，自己呈示を統制していると言える。一方で，関係依存演技因子はセルフ・モニタリングとの相関を示さなかった。これに関連して秋山・松浦（2019）は，〈キャラ〉の切り替えは「自然・無意識」を主な動機として行われており，〈キャラ〉を「意識的に変えている」というよりも「何となく，気づいたら変わっている」というような変化であることを明らかにした。これらのことから，場に適応するための〈キャラ〉の使い分けは必ずしも意図的な行為というわけではなく，状況に合わせて無意識的に行っている可能性があると言える。よって，改訂セルフ・モニタリング尺度は意図的に自己呈示を変容する傾向を測定するものであるため，関係依存演技因子との相関が示されなかったと考えられる。したがって，関係依存演技因子の妥当性については，日常的なコミュニケーションにおいて演技をする傾向を測定する既存の尺度によって，検討することが有効である。

3. 現代青年のアイデンティティ

本研究の調査においては，作成した 29 項目のうち９項目が天井効果を示すという結果が得られた。このことから現代青年の自己のあり方とアイデンティティについて考察する。

まず，「場面によって表に出てくる自分は違うと思う」「話す相手によってふるまい方を使い分けている」など，自己の多元性や使い分けを測定する項目の多くで天井効果が見られた。これらの項目が天井効果を示したことは，現代青年はそれぞれの場面に応じて自身の振る舞い方や感じ方を切り替えており，彼らの自己はそれに応じて多元的なものになっているという浅野（2015）の指摘を裏付けている。また，「本当の自分は，一つだけではないと思う」という項目においても天井効果が見られた

ことから，現代青年は自分らしさをひとつの自己イメージとして捉えておらず，本当の自分は多元的なものでありうることがわかる。

Erikson, E.H.（1959 小此木訳 1973）のアイデンティティ論に代表されるように，青年期においては統合され一貫性のある自己像を持つことこそが望ましく，適応的であるとされてきた。しかし近年，青年にとっての役割実験の場における価値や役割も多様化しており，その中で価値や役割を取捨選択しつつ，自己を統合していく作業はより困難になっているとされている（木谷・岡本，2018）。このような時代の変化の中で浅野（2015）は，多元的自己という自己のあり方が思春期・青年期の若者を中心に一般化していると指摘した。多元的自己とは，複数の自己を持ちながら状況に応じてそれを使い分けるというあり方を表している。また浅野（1999）によると，多元的自己は必ずしもアイデンティティの拡散と同義ではないとされ，対人場面によって自己を使い分けている青年は，関係性や状況に応じて複数のアイデンティティを有している。このような様相を呈したあり方は多元的アイデンティティと言われ，多元的な自己を有する青年は多元的アイデンティティという Erikson, E.H. の提唱したものとは異なった形のアイデンティティを形成しているとされている。本研究においても，現代青年は対人場面に応じて表に出る自分を使い分けており，本当の自分らしさを単一のものとしてではなく多元的なものとして捉えている傾向があると示されたことから，多元的な自己と多元的アイデンティティを有する者が増えているという主張を支持する結果が得られたと言える。

4.〈キャラ〉と多元的自己

最後に，多元的自己と〈キャラ〉の関係について考察する。先行研究においては，〈キャラ〉は多元的自己の個々の部分的な人格であると述べられており（浅野，2015），〈キャラ〉は複数ある本当の自分のうちの一つであるとされている。一方で本研究の尺度作成においては，「人と話すときに，本当の自分とは別の人柄を演じていると思うことがある」「人と話すときは，常に本当の自分とは全く別の人柄を演じている」というような，演じている〈キャラ〉を本当の自分と区別する項目が採用された。このことは，浅野（2015）の主張とは異なり，対人場面で演じる〈キャラ〉は自認する自分らしさとは性質が異なっている場合があるという可能性を示している。さらに，〈キャラ〉を用いる青年自身が〈キャラ〉と本当の自分の関係性をどのように認識しているかについて質的に調査した村井・岡本（2018）は，〈キャラ〉は「素の自分から派生した一部」，「素の自分を覆うもの」，「素の自分とは全くの別物」などの結果が得られたことを報告している。本当の自分と〈キャラ〉のイメージには個人差があるものの，いずれにしても〈キャラ〉そのものが本当の自分であるとは認識されておらず，〈キャラ〉と本当の自分の間には何らかのズレがあると言える。

以上のことから，〈キャラ〉は本当の自分とは何らかの点で異なる仮の自分であり，多元的な自己の一部分と考えるべきではないと思われる。多元的な自己のあり方と〈キャラ〉行動は，場面に応じて別の人物のようにふるまうという点においては同じ現象のように見える。しかし多元的な自己のあり方が複数の本当の自分を使い分けることであるのに対して，本研究で示した〈キャラ〉行動は状況に応じて仮の自分を演じることを意味している。言い換えると，場面ごとに異なる自分を使い分けるというときに，その自分が本当の自分であると感じられる場合には多元的自己であり，本当の自分ではなく仮の自分であると感じられる場合には〈キャラ〉であると言うことが出来る。よって，両者を概念的に区別した上で議論していく必要がある。また，多元的自己を持つ者は，多元的アイデンティティを有しているとされている一方で，〈キャラ〉行動をする傾向のある者が，どのようなアイデンティティや自分らしさの感覚を持っているかについては明らかになっていない。そのため今後の研究においては，〈キャラ〉とアイデンティティや自己との関係を本研究で作成した〈キャラ〉行動尺度を用いて検討し，現代青年の自我構造についてもより詳細に明らかにする必要がある。

引 用 文 献

秋山華穂・松浦　均（2019）．“キャラ”を介したコミュニケーションが集団内の人間関係に及ぼす影響．三重大学教育学部研究紀要，**70**，187-197.

浅野智彦（1999）．親密性の新しい形へ．富田秀典・藤田正之（編）．みんなぼっちの世界―若者たちの東京・神戸 90’s 展開編―．恒星社厚生閣.

浅野智彦（2006）．検証・若者の変貌―失われた 10 年の後に―．勁草書房.

浅野智彦（2015）．「若者」とは誰か アイデンティティの 30 年【増補新版】．河出書房.

千島雄太・村上達也（2015）．現代青年における“〈キャラ〉”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連―“〈キャラ〉”に対する考え方を中心に―．青年心理学研究，**26**，129-146.

千島雄太・村上達也（2016）．友人関係における“〈キャラ〉”の受け止め方と心理的適応―中学生と大学生の比較―．教育心理学研究，**64**，1-12.

土井隆義（2009）．キャラ化する / される子どもたち―排除社会における新たな人間像―．岩波ブックレッ

ト．
Erikson, E.H.（1959）. Identity and the life cycle. New York: W.W.Norton & Company.
小此木圭吾（訳編）（1973）．自我同一性．誠信書房．
藤野遼平（2019）．青年期における「キャラ化」に対してパーソナリティが与える影響について．大阪大学教育学年報，**24**，83-95.
藤野遼平（2022）．現代青年における自己の多元性の分類とアイデンティティの関連．青年心理学研究，**33**，87-104.
後藤順子（2010）．現代日本の若者のアイデンティティ再考―キャラ的コミュニケーションからみる自己概念のダイナミズム―．兵庫教育大学学術情報リポジトリ．https://hyogo-u.repo.nii.ac.jp/record/6075/files/M09146G.pdf（2022 年 7 月 8 日取得）
本間友巳（2009）．“いじられキャラ”となっている子をどう考え，どう支援するか．児童心理，**63**，98-102.
石原俊一・水野邦夫（1992）．改訂セルフ・モニタリング尺度の検討．心理学研究，**63**，47-50.
岩淵千明・田中国夫・中里浩明（1982）．セルフ・モニタリング尺度に関する研究．心理学研究，**53**，54-57.
今　一生（2011）．いまどきの若者風俗における“キャラ疲れ”―人格改造から関係作法の気づきへ―．児童心理，**65**，30-36.
木谷智子・岡本裕子（2018）．自己の多面性とアイデンティティの関連―多元的アイデンティティに注目して―．青年心理学研究，**29**，91-105.
Lennox, R.D., & Wolfe, R.N.（1984）. Revision of Self Monitoring Scale. Journal of Personality and Social Psychology, 46, 1349-1364.
村井史香・岡本祐子（2018）．青年期の“キャラ”と“本当の自分”との関係性について―大学生の語りと描画から―．日本心理学会第 82 回大会発表論文.
村井史香・岡本祐子・太田正義・加藤弘通（2019）．中学生・大学生の“自認するキャラ”を介した友人関係とセルフ・モニタリングとの関連．子ども発達臨床研究，**15**，31-39.
村井史香・岡本祐子（2021）．大学生の友人関係における“自認する〈キャラ〉”の形成・維持プロセスの検討．心理臨床学研究，**38**（6），480-492.
荻上チキ（2008）．ネットいじめ　ウェブ社会と終わりなき「キャラ戦争」．PHP 研究所．
大山摩季子（2021）．現代青年の対人関係におけるキャラの役割―家族，親友，友人，部活における関わりからの考察―．関西福祉大学研究紀要，**24**，41-50.
斎藤　環（2011）．キャラクター精神分析 マンガ・文学・日本人．筑摩書房．
渋川瑠衣・松下姫歌（2010）．大学生における自己の変動性・多面性の概念について―学生相談における臨床的理解と意義の視点から―．広島大学心理学研究，**10**，171-183.
島　義弘（2019）．“キャラ”の有無およびその受け止め方と大学生の自己：自尊感情，アイデンティティ，自己愛に着目して．鹿児島大学教育学部研究紀要．人文・社会科学編，**70**，121-132.
Snyder, M.（1974）. The self-monitoring of expressive behavior. Journal of Personality and Social Psychology, **30**, 526-537.